

り絵本作家として不動の地位を築いたセンダックは、合間に意欲的なイラストレーションを他人の作品で試みながら、『まよなかのだいどころ』(七〇)、『まどのそとのそのまたむこう』(八一)で幼児回帰をテーマとする三部作を完結する。センダックの仕事は、イラストレーションにとどまらず、アニメーション映画、舞台芸術に独創的な才能を発揮し、その中から、また『くるみわり人形』(八四)のような優れた絵本が生まれてきている。

(渡辺茂男)

ソ

宗 影えい → ソン ヨン総合童話大講座だいこうどうわ 全一二巻。日本童話協

会発行。一九三二年(昭七)から三四年(昭九)にかけて会員制で頒布。編集は蘆谷蘆村が当たり、同時に中心的執筆者でもあった。内山憲尚、安倍季雄、岸辺福雄らの口演童話系統の執筆が目につく。ほかに巖谷小波、小川未明、山内秋生らの名もある。童謡関係の執筆は、

弘田龍太郎のみで、先行の『児童芸術講座』(一九三三(二五))とは際立った対照である。とりたてての「開講趣旨」を示す文章はみられないが、「童話ヲ完全ナル組織的体系トシテ研究スベキ」(第一集巻頭言)方向を求めた。『童話の理論』(松村武雄・蘆谷蘆村)、『日本童話史』(中田千畝・藤沢衛彦・山内秋生)、『世界童話史』(蘆谷蘆村(重常))がまとめられ、『宗教童話論』(蘆谷蘆村)、『仏教童話論』(蘆谷・長井真琴・菅原霞村)、『基督教童話論』(蘆谷・上沢謙二・小出正吾)などの各論も合わせて構成された。児童劇・人形劇・口演童話・舞踊などの児童文化関係の論稿も収録された。

(大藤幹夫)

早大童話会うわだいいど

団体。一九三二年(大正)春、学生数名の発起により創立。会長は上井磯吉教授。(英語担当)。実演部と創作部に分かれ、はじめは前者が優勢

だったが一九三〇年、岡本良雄、水藤春夫らが入会後は後者の活動が中心となった。一九三五年同人誌「童苑」を、翌年には機関誌「童話界」を創刊。その後、町本広、前川康男、永井萌二、鈴木隆らが入会し最盛期を迎えた。一九四三年には、坪田讓治編による童話集『町の子・村の子』、『たのしい仲間』を天祐社より刊行する(発行部数五〇〇〇)が太平洋戦争の激化により出征する先輩会員を送る「童苑」四号を発行して会活動は中断。終戦後は古田足日、鳥越信らが受け継ぎ五一年「童苑」五号を復刊、五三年には同誌に宣言文

「少年文学の旗の下に」を発表。ついで五五年には、会名を「早大少年文学会」に変更、機関誌を「少年文学」と改題し四〇年に及んだ会の歴史を閉じた。同会から巣立った作家、評論家は前出のほか今西祐行、竹崎有斐、大石真、砂田弘、鈴木実、大川悦生と多彩である。

相馬御風 さうまごふう 一八八三—一九五〇(明16—昭25) (塚原亮二)

評論家、歌人。本名昌治。新潟県糸魚川市に生まれる。高田中学時代、佐佐木信綱の竹柏会に入会。一九〇〇年に高田新聞の短歌の選者となる。〇二年早稲田大学に入学、東京純文社を興し、雑誌「白百合」を創刊。

〇五年処女歌集『睡蓮』を上梓。翌年早大を卒業し、片山天弦らと「早稲田文学」の編集に従事する。〇七年三木露風らと五人で早稲田詩社を設立、口語詩運動の口火を切った。明治末期の評論家としての活動では、理論よりもむしろ作家論に優れたものが多い。一一年早大講師として教壇に立つ。翌年、第一評論集『黎明期の文学』を刊行する。大正時代に入って、しだいに人道主義的傾向を示し、一六年文壇から引退して、糸魚川に帰る。それ以後は良寛に傾倒、研究の深化とともに宗教的世界に没入する。『大愚良寛』(一九一八)、『評釈良寛和尚歌集』(二五)、『良寛百考』(三八)など、良寛関係の書は多く、良寛の伝記・思想・文芸を明らかにした功績は大きい。郷里での活動としては、三〇

年木蔭会を組織し、歌誌「木かげ」を刊行、四二年(一〇二号)まで続いた。また、同年個人雑誌「野を歩む者」も創刊、主に随筆を執筆、五〇年(九〇号)まで刊行した。児童文学作品には、童謡集『銀の鈴』(三三)、伝記『良寛さま』(三〇)、『西行さま』、『一茶さん』(三二)、童話集『日のさす方へ』(三四)がある。童謡「春よ来い」は広く人口に膾炙されている。

【参考文献】紅野敏郎・相馬夕子編『相馬御風著作集 別巻一 研究編』(一九八一 名著刊行会) (深川明子)

相馬泰三 さうまたいぞう 一八八五—一九五二(明18—昭27)

小説家、児童文学作家。本名退蔵。新潟県白根市に生まれ、早稲田大学英文科中退。「万朝報」や「東京日日新聞」記者をしながら翻訳や小説の習作に打ち込む。一九一二年(大1)広津和郎・舟木重雄・谷崎精二らと「奇蹟」を創刊し、『夢』『小さき影』などを発表する。『田舎医師の子』(一九一四『早稲田文学』)で認められ、文壇に登場した。長編小説『荆棘の道』(一八)が代表作で、力作としての評価が高い。泰三の作家としての活躍は、大正期ではほぼ終わり、北海道や樺太放浪を経、郷里新潟に隠棲。晩年は紙芝居に関心を寄せ、東京葛飾で戦中戦後の時期、紙芝居の普及に尽力した。児童文学とのかかわりは、『荆棘の道』が「奇蹟」同人との間にモデル事件を起こし、小説がしだいに書きにくくなった中で、千葉省三編集の「童話」に執筆の機会を

得てからのことである。この雑誌の創刊号(二〇)から『桃太郎の妹』を一年にわたって連載、以後二〇数編もの作品を寄せている。「赤い鳥」にも、『休み日の算用数字』(二七)ほか四編を載せる。創作童話ばかりでなく、翻案ものもある。『甚兵衛さんとフラスコ』(二五)、『紀平次の畑』(二六)、『名のない魚の話』(二五)など、そのユニークな作品世界は、今日の子どもにも訴えるものをもっている。創作童話集に、『陽炎の空へ』(三三)がある。五二年五月一五日歿。

【参考文献】関英雄『相馬泰三の児童文学』(一九七二・一一)国文学)、伊狩章『相馬泰三解説』(一九七七)『日本児童文学体系』(ほるぷ出版)

園部三郎 そのべ さぶろう

一九〇六―八〇(明39―昭55) 音楽

評論家。大阪に生まれ、一九二七年東京外国語学校仏語科卒業。早くより海外に出、帰国後内外の音楽評論や翻訳に当たり、『音楽評論』二代目主筆として音楽批評確立に努めた。戦後まもなく、ブルガリア、ポーランド、ハンガリーに渡り、その東欧音楽文化を研究、日本への紹介に努め、のちポーランド政府より文化功労賞を受けた。また晩年は国内の音楽教育現状に問題を提起し、著書『下手でもいい、音楽の好きな子どもを』(七五)には賛同者多く、話題となる。主要著書『音楽五十年』(四九)、『日本民衆歌謡史考』(六二)、『自立せよ、音楽教育』(八〇)他翻訳書多数。(河村順子)

ソーヤー Ruth Sawyer 一八八〇―一九七〇 アメリカの児童文学者、ストーリーテラー。*民話の語りの研究、普及に努め、学校をはじめさまざまな所で語りをし、児童図書館におけるお話の普及にも貢献した。語りの基本を述べた『ストーリーテラーへの道』(一九四二)は、語り手の必読書になっている。民話の再話のほか、アメリカの子どもの生活を描いた作品も書き、『ルシンドアの日記帳』(三六)は、ニューベリー賞を受賞。(白井澄子)

征矢 清 せいや しみず

一九三五―(昭10―) 作家、編

集者。長野県岡谷市に生まれ、一九六〇年早稲田大学第二文学部露文学科卒業。みず書房、こども部屋社を経て現在は福音館書店に勤務し、編集に携わりながら創作活動を続ける。『やまのこのはこそぞう』(一九六八)を発表後、「児童文学は子どもたち自身のものである」という立場から数多くの作品を書き続ける。代表作に『かおるのひみつ』(七三)がある。(白木諭弥)

ソリアノ マルク Marc Soriano 一九一八―フランスの学者、批評家。ボルドー大学でフランス初の児童文学講座を開き、パリ第七大学および高等研究院で児童文学を含む「文学の新領域」の講座を担当。博士論文『Les Contes de Perrault-culture savante et traditions populaires』ペロー童話―学識文化と民間伝承』(一九六八)は学際的研究を特色とし、アカデミズム

内^{*}で口承文芸や児童文学を研究対象とした点で画期的である。二〇年間の势力的な批評活動を集成した事典『Guide de littérature pour la jeunesse 児童文学案内』(七五)や『Jules Verne, biographie』(ノール・ウェルヌ伝)(七八)がある。

(新倉朗子)

ソログロフ フョードル Фёдор Коробь 一八六三—一九二七 ロシアの詩人、作家。前期象徴派の代表。本名フョードル・K・テテールニコフ。ペテルブルグ(現レニングラード)に生まれる。高等学校の教師をした後、代表作、『小悪魔』(一九〇七)、『創作伝説』(一四)、処女詩集『炎の輪』(〇七)を書く。児童文学作品としては『金色の柱』、『影絵』などあり、日本でも大正末から昭和初年にかけて翻訳出版されている。(北畑静子)

ゾロトウ シャーロット Charlotte Zolotow 一九一五— アメリカの絵本作家、編集者。出版社の児童書編集部に勤めたのが契機となつて、自身の幼時体験と二人の子どもの観察を基盤にした作品を数多く発表している。兄妹間のライバル意識を扱った『にいさんといもうと』(一九六〇)、M・チャルマーズ絵に代表されるような「児童心理学の講義以上に幼児を理解させてくれる」といわれるほど、幼児の心の動きを捉えた作品が大半を占める。

(金平聖之助)

宋 影 ヨン 송 영 一九〇三— 朝鮮民主主義人民共和国の児童文学者、劇作家。本名宋茂玄。ソウル

西大門に生まれる。一九一九年三月培材高普中退。二五年カッブ創建に参加し、「朝鮮文芸」「星の国」などの編集を担当する。カッブ事件で投獄される。解放後、朝ソ文化協会出版局長、朝鮮演劇同盟委員長、作家同盟中央委員歴任。作品に『交替時間』(一九三二)、『老人夫』、『夜学の教師』(以上三四)、『江華島』(五三)など世相を鋭くついた風刺劇が多い。(韓丘庸)

夕

大衆児童文学

うたいしょうじと
うぶんがく